

神 代 の 星 々

S · 1 生

悠遠の神代の昔のことは、よろづ詳かでありませんから、我々は現在集めることの出来る僅かの資料から想像し研究して推論するより外途がありません。今茲に述べんとする神代の星についても亦其材料が甚だ乏しい爲め、研究に困難を來す次第であります。

さて、申すまでもない事ですが、我が皇國は世界に比類のない國體を持ち又立派な歴史を持つて居る國柄でありますが、我國に傳はる神話によれば、皇祖天照大神は、畏れ多くも太陽神であらせられ、古往今來八紘を照らして居られるのであります。只今聖上陛下を天子様と申上げるのも天の御子様と云ふ意味なのであります、更に高貴の御方は日の御子、即ち日子又は彦であらせられ、

女子の御方は日の女郎ち日女であり、媛と呼び奉るのであります。つまり一般に我が大和民族は太陽の子の子孫であつて、上一天萬乗の天子様を戴く太陽の民なのです。

我が國最古の史籍である古事記や日本書紀の神代の卷は極めて神秘的な傳説で綴られて居て、天地及び國の成立の事が述べられてあります。

そして之等の史籍を讀むと、太陽郎ち日に關係のある御名を持つて居られる神々は例へば高御産巢日神、神産巢日神、大戸日別神、速秋津日子神、瓊速日神、天若日子、饒速日命等澤山居られますが、天照大神の御弟君なる月讀命の御事も記載されて居ります。月讀命は月の神の御神格で居られます。そして天照大神は高天原を始め給ひ、月讀命は滄海原を治め給ふたのですが、之は日月の晝夜の分掌を表して居るのでありまして、月讀命が海原を受け持たれたのは、月の出入と潮の干満との關係の聯想から來て居るのであります。(次田潤著「古事紀新講」)

併し神代の卷には日月以外の天體や星辰に關する御名の神々は餘り見當りません。それが爲め、或る論者は「神代から我が大和民族の天體に對する關心は極めて少く且つ單純であつた」と云つて居ますが、なかなか、どうして海外諸民族の古代神話に較べて見ても遜色のない興味ある物語が可なりあります。

それは先づ舊事紀卷三の天神本紀に載つて居る諸々の神の御名であります。

(猶舊事紀は偽書である云はれて居るが、其の著作の年代が古く、同書の天神本紀などは信用するに足る部分であります。)

壹岐縣主等祖

天月神命

筑紫弦田物部等祖

天津赤星

爲奈部等祖

天津赤星

天津赤星は天の明星と讀んで、曉の明星或は宵の明星即ち金星のこと、解釋できますが、之は赤い星と見る方が適當らしいやうです。さうすると赤星は今の蝎座のα星「アンタレス」か、或は火星かの何れかであらうとの想像が出來

ますが、併し之は火星と見る方がよいでせう。と云ふのは、火星は、二年毎、更に十五年毎に、地球に接近して來て、視直徑が大きくなり、星の色は極めて赤いルビー色であるからです。

又、同じ舊事紀に「天有惡神、名曰天津瓊星、亦名天香香背男」と記されて居て、之は書紀にも「一書に曰く」として載つて居ます。天津瓊星と云ふのは天の大きな星の意味でありまして、香々背男の香々は耀きと云ふ意味に解釋出來るのですが、天に耀く大きな星は古來歳星と云はれて居る木星か、或は金星か、更に又は全天の恒星の中で第一等の光輝を持つシリウス星か、其の何れかに當る筈であります。古史傳によれば金星と判斷してあります。然し同じ書紀の同じ箇條に「一書曰く」として、豊葦原中國の騒しい事が記されてありまして、舊事紀の星の神香々背男に當る所に「夜は煙火の若に喧騒ひ」と云ふことがありします。此の「煙火の若に」と云ふのは火盆の様に或は又流星の様にと云ふ意

味に解釋出來ますので、夜の暗騒をば古代の人は天空に突如として音響を立て
、耀き亂れ飛ぶ流星或は火球に譬へたものと云ふことが出來ます。従つて星の
神々背男は、木星でも、金星でも、將又シリウス星でも無く、ごうも流星の
表現と考へる方が適當であります。

又、倭訓栞に『神代紀に天安河所在五百箇磐石とあるのは天の河の星象を云
ふ』と書かれてありまして、銀河の密集した星の群が聯想されて誠に興味深い
ことですが、書紀神代の卷を見ると「一書曰く」として「其の血激り越えて天
八十河なる五百箇磐石に染む」とあつて、美しい銀河の聯想も打消されて終ひ
ます。之は高木神が投げ給ふた矢に當つて天若日子が死なれた時に、天の河原
の多くの岩石を血で染めたと云ふのであります。

けれども、其の直ぐあとに下照比賣の、美しい歌が出て來て、又もや天空へ
と其の聯想を呼び返します。

下照比賣したてるひめは天若日子あまのわかひこの妻つまでありまして、比賣ひめの兄あに阿治志貴あじしき高日子根神たかひこのかみが天てんに昇のぼつて天若日子あまのわかひこの死しを葬ほうむられた時とき、下照比賣したてるひめが讀よまれた歌うたは、

『天あまなるや 弟機織おごたなはたの うながせる

玉たまの御統みすまろ 御統みすまろの 穴玉あなだま

はや み谷たに 二わたらす

阿遲志貴あぢしき 高日子根たかひこの 神かみぞや』

即ちすなは之これは天てんにます機織はたなり乙女おとめの首くびに懸かけて居ゐる玉飾たまかざりが美うつくしく光ひかつて居ゐる有様ありさまを歌うたつたのでありまして、高日子根たかひこの神かみの美うつくしさを天あまの御統みすまろの玉たまとして織女おりひめ星せい座ざの星等せいどうになぞらへ讃たへて居ゐるのであります。

思おもふに、神代かみよの昔むしにあつても、日月星辰じつげつせいしん以外いぐわいに、あの夏なつの夕ゆふに天空てんくうを南北なんぼくにかけて白しろく光ひかつて流ながれる天あまの河がは、當時たうじの人々ひとらが注意ちゆういして眺ながめた所ところでありませうし、古語拾遺ここしういや舊事紀きうじきに天棚機姫神あまのたなはたひめがみと云いふ神かみの御名おんながあり、之これには多少たせう議論ぎろん

もありますが、牽牛織女の傳説が支那では秦漢の頃から存在して居たことを考へ合せますと、天安河は銀河の事であつてもよいことになります。そして、銀河が人の目につき易いのは一年中で夏が最も顯著でありますので、古事記の此處の記事は眞夏の頃の出来事と解釋していゝわけです。

神代の空の星の位置は今の天空上の星の位置とは歳差の關係で大分違つて居た筈です。天の北極は今の北極星と龍座の α 星との大體中間に位し、又、現在の南半球の星として日本では全く見えない南十字星やセントウルス座 α 星は南の地平線上かすかに眺めることが出来た筈です。

(終)